

第18回 優秀賞(銀の星賞)受賞作品

# 「月とトマト」

福岡県立修猷館高等学校三年 瀬口 愛奈



賢治のまちから  
**全国高校生★童話大賞**

優秀賞〈銀の星賞〉

『刃とトマト』

福岡県立修猷館高等学校三年瀬口愛奈

運動神経は割と良い方だ。だから、俺はその新鮮なトマトを落としたくなかっただけなのだ。絶対に。それだけだったのだが、まさかああなるだなんて、予想もしていなかつた。

料亭でのバイトの休憩時間。裏部屋にひつひみ、リュックからタッパーと宇宙の写真集を取り出す。タッパーの中には一いつのトマト。蓋ふたを外し、ランダムに開いた写真集を隣に置いた。ページには丸い“月”が写っている。高校三年生、幼少期に両親を交通事故で亡くし、三年前にそれまで面倒を見てくれていた十五歳年上の兄貴を病気で亡くして以来、大学で天文学を学ぶためにこの料亭で働かせもらつて何とか勉強している俺。少しでも節約したいので、昼食はいつもトマトなのだ。

トマトを齧かじる。じゅくじゅく、と音がして、口の中に広がる甘じ果汁。その後に、柔らかな果肉。安アパートの狭いベランダでも、良い野菜は出来るもんだ。果汁が、顎あごを伝う。手の甲でそれを拭ぬぐい取り、齧ったトマトを見る。と、鮮やかな赤に、透明感のある果汁。赤い容器ひとつぱいに注がれた聖水のようなそれは、裏部屋の蛍光灯の光を受けてきらめいている。

トマトの美味さに、すぐに一つ目を食べ尽くす。続いて、写真集を覗覗込みながらそちらを見ずに、一つ目のトマトに手を伸ばした。

掴つかんだといひまでは良かった。その後、口に運ぶ途中に、手が滑つてしまつたのだ。落下するトマトに、持ち前の運動神経で手を伸ばす。キヤッチは、出来た。問題はその後だ。

椅子に座ったまま。ペンを拾つたあと、バランスを崩して壁に、そのペンを持つた手をつくところのはよくあることだと思つ。



ただし、俺の場合、拾ったのはトマトで、そのトマトを持った手をついてしまつたのが休憩に入るためになにかとてまたま通りがかった、店長だったのが、決定的な間違いだった。

「あ……」

店長が漏らした声に、裏部屋の空気が、固まつたように感じた。白いコックコードをまるで鮮血のように染めている潰れたトマト。もう十分心にダメージをくらつたのに、本当に心が折れそうになつたのはその後だった。

「……あー、店長、『めんなさい、本当に』『めんなさい、謝ります……そ の、本当に』、心から、謝りますんで、そのクリエイティブなドッキリやめて頂けませんか?!」

人間、パニックになるとつらつらと言葉が出てくるもんだ。洗いますと言つたが断られ、奥のお手洗いに引っ込んだ店長に罪悪感で耐えられなくなつて、再び声を掛けに来ただけだから、店長には、今すぐ、やめて欲しい。トマトが肌にのめり込んでいるところの冗談を！

「あ、見ちゃった？」

「あわててるよつた様子もない、眉を下げるながら、その骨ばつた手で後ろに流れている髪を搔く。

「見ちゃつた、じゃないよ、何ですか？！」

平然とする店長に対し、滅茶苦茶動搖する俺。それはそうだ。どうしてトマトが肌にめり込んでいる成人男性に驚かないだらうか！

慌てる俺に、コックコードを脱いだままの店長は困つたよつた顔をした。「んん、説明してもいいけど、信じるかい？」

「……何ですか。」

「ほら、二八年前、大昔の、なんとかの大予言が騒ぎになつただらう？君は生まれてないけど、話には聞いたことがあるんじゃないかな。その年に星たちが一瞬にして消え、人類も滅びてしまう、みたいな。」

「あつたつて聞きますけど……世界は滅びませんよ、あれ嘘でしょう。」

それと「これどが何の関係があるのか」と俺は訝しげに店長を見る。予言は本当だよ、と店長が微笑んだ。

「僕が世界を救ったんだ。」

「待て、いや、なんすかあんた、その嘘！」

「こり、『あんた』呼びは禁止。あと、世界を救ったのは、嘘じゃないよ。」

「俺が店長の」とを「あんた」と呼んでしまうのをいつもと変わらず注意し、笑う店長。

店長はあるで冗談のように、俺に勉強を教えてくれたり、構つてくれたりするので、俺はつい敬語が抜けてしまうことがある。それを注意してくれるのもまた、今度は父親のような店長なのだ。だから今の店長の俺に対する反応は至極いつも通りで、状況のおかしれとのアンバランスに俺はますます混乱した。

「君は、今の世界が、この現実に生まれた最初の世界だと思うかい？」

「……勿論そうでしょう。宇宙が一三八億年前に誕生して、地球が四六億年前、人類が大体四〇〇万年前。学校で習いましたもん。」

指を折りながら答える俺に、店長が笑う。

「それは、二回目の話だ。」

「あ?!と思わず素<sup>す</sup>っ頓狂<sup>とんきょう</sup>な声を上げた。

「二回目の人類は、二回目の人類と大体同じ道を辿<sup>たど</sup>っていたんだ。でも、丁度二八年前にあつた予言のようなものがその時もあつて……誰も、そう、例えば君たちが神様とよぶような存在さえも対策を講じていなかつたから、予言通り、星は消え、人類も滅びたんだ。」

だから僕は、と自分の胸に手を当てる。

「そういう存在に、二回目の宇宙の星が消える瞬間星になつて今までと変わらぬ宇宙を続けさせろ、救つてやれって感じで作られた。」

説明に全く頭が追いつかない。

「……じゃあ店長、自分が無敵のヒーローとでも?」

「んー、むしろ身を呈<sup>てい</sup>して世界を守るヒーローかな。命を削つて世界を救う。星を産もし、最終的には全部、星になつて完全消滅する。」

「ええ……じゃあなんで世界は救われているの?」「じぶんすか? といふか、そのびっくりマトと何の関係があるんですか? !」

「世界が救われてゐるのに俺が居るのは、そう、俺にとつても謎なんだ。」



店長が、頭を伏せる。

「でも、トマトは……うーん、星を産んだから、中が文字通り空っぽなんだよね。それで、星なんていう大きな質量のものが入っていたのだから、よく分からなければ、中の密度とか、そんなのが大きいのだろう。だから、入つて」ようとしてるんじゃないかなあ。」

そう言つて、胸筋と腹筋の間に埋まっているトマトを撫<sup>な</sup>でる。かつては俺の家の安アパートですくすくと育つていたトマトを。全く違う未知のものに見えて、俺は目眩<sup>めまい</sup>を覚えた。

「え、星を……産んだ? 意味分かんないですよ……大体、星を産むって、何ですか? そんな、信じられないですよ。俺、天文学やろうとしてるんですけどよ。天からの便りを受け取る、つて仕事。今までその便りは絶えたことがないんです。空にはいつも同じ星が光り続けているし、あなたはただの人間だ。非科学的ですよ。俺から見たらあなたはただの、何故かトマトが体に溶け込む人なんです。」

呻<sup>うめ</sup>いて、両手を顔で抑える。申し訳なさそうに、店長がひみつの様子を伺<sup>うかが</sup>つているのが分かつた。肌にトマトをぬり込ませたまま。

「……取り敢<sup>あ</sup>えず、トマト、俺の腹に入れてみる?」

「何でだよ!」

「……いや、なんか抜くの怖いし……あと真珠のよつなものが作れそうな気がして。」

「何言つてるのあんた。」

指の隙間<sup>すきま</sup>から恐る恐るトマトを見る。トマトは相変わらず、つるつるとした赤い肌で、お手洗いの薄暗い蛍光灯の光を反射していた。

「ほら。」

「ええ、無理、無理です、そんな人の体にめり込んだ野菜を触る趣味ないんで!」

俺の手首を掴んでトマトを押し込ませようとする店長に必死で抵抗する。

店長はいつにないほど楽しそうだ。

店長の力は強くて、あと、声を出した瞬間、俺の指がトマトを押した。

「つああ、入つ、入つていぐ、い、痛くないすか?!」

「いやあ、星なんて大きな物を産んでるんだから別に」これくらい……」

「「」——このつてね、見てる方が怖いんですよ。」

トマトは、まるで店長の肌が片栗粉を水で固めたものでもあるかのように、ずぶずぶと沈んでいった。

肌にめり込んでいるトマトという現実感のない光景が無くなると、少し冷静さを取り戻してきた。店長が笑いながら俺の腕を離す。

「賑<sup>にぎ</sup>やかな奴だなあ。」

「そ、そりゃあ賑やかにもなりますよー。あなたの肌の主成分何なんですか！」

「敢<sup>ほ</sup>えて言<sup>い</sup>うなら 星體<sup>ほし俸</sup>？」

「もー……全然信じらんない……」

とこかく、と俺は目頭<sup>おがしの</sup>を押<sup>お</sup>さえた。

「……これ、他に知つている人は?..」

店長が首を振る。

「勿論、君だけだ。」

「絶対他の人に野菜の消化吸収を肌から出来るつて」と言つちや駄田ですよ。捕まえられて研究されちゃうかもしないですからね。」

「いや、これ野菜を消化吸収してるわけじゃなくて……」

「俺からしたらそれが真実なんです。」

拗<sup>す</sup>ねたように言<sup>い</sup>う。でも、店長がこんな嘘を吐<sup>つ</sup>ぐだろ<sup>う</sup>か。トマトが消えたのも、二八年前になんとかの大予言があつたのも真実だ。

そこで、ふと、思い当たることがあつた。

「……二八年前つて、『月』が消えた年か。」

「……え?」

後ろを向いてコックコートを着直していた店長の動きが、止まる。

「……ああ、いや、『月』って星、知つてます? それが無いんですよ、二八年前から。で、俺はその原因を探りたいから、空に关心が払われないこの時に、天文学をやろうと思つて……あ、もしかしてこれが店長の疑問への答えじゃないですか? 星を産んで世界を部分的に救つたけど、月は産まなかつたから店長はまだ「こ」にこる……とか、」

「冗談ですけどね、と続けようとして、振り返った店長の表情を見て、やめた。というより、言葉が出てこなかつた。」



「そうか……そうだ。」

店長は、喜びだか、困惑だかよくわからない、感情をぐつた混ぜにしたような、今までに見たことのないような表情を浮かべていた。

「そういえばそうだった、やっぱり、余りが出るだなんておかしいと思つたんだ。」

その日は、俺の方を見ていなかつた。

「そうか、世界が違うから、ある一つの星が無くとも、違和感がないような心の作用が……生まれたのか。確かに、星や空は、日常に関係ない……」の少年以外の天文学者までもが気にかけないのは、どうこう理由かはわからないけれど……」

「……店長？」

俺は不安になつて、呼びかける。

天からの便りは絶えたことがない、と言つたままにしておけばよかつた。  
『月』よりも星座。『月』なんて、空に関心を払わない世間の中で『月』まれ稀にいる星を見る人たちでさえ誰も注目していなじょうな星だから、店長がこんなに反応するだなんて思つていなかつた。

「まさか完全消滅するだとか……嘘みたいな」と、言わないですよね？ 店長はずつと、この料亭の店長ですね？」

店長は返事をせず、眉を下げる微笑んだ。

俺はそれに、言こよのない不安を感じたのだった。

昼の太陽がない分、蛍光灯があつても少し暗い裏部屋。俺は店長に促され、テーブルをはさんだ向かいに腰かける。

「いつも午前が夕方のシフトの俺を夜に呼ぶなんて、何があつたんですか？」

その言葉に、ああ、と店長が頷き、いたずらっぽく笑つた。コックパンツのポケットを「こそこそ」といじつて、

何かをテーブルの上に置く。質量が大きいらしく、鈍い音がした。

……見覚えのある、数日前のトマトだった。

「待つて下さる、これどうこう」とですか？！ 何ですか？！」

「トマトだよ。」



「それは見れば分かります！」

動搖する俺を、店長が楽しそうに見る。

「真珠のようなものが作れそうな気がすると書つてこただのう。……出来たんだよ。」

くす、と店長が笑つて、俺の手首を掴んだ。手のひらの上に、トマトをべつと押し付けられる。それはトマト本来の重さではなく、ずっと重かつた。

「そう言わないで、受け取つておくれよ。君への贈り物だ。」

「え、つまりあなたの体内から出でたつて」とでしょ？ グロテスクですよ…」

トマトを返そうとするが、先程までのふわふわた感じを引っ込んで、店長が俺の手を見る。

「……いいから。きっと、お前の道しるべになるつて願いを込めたんだ。」「ぽんぽん、と俺の手のひらの上のトマトを軽く叩いて、俺の腕を放す店長。これで店長にトマトをつき返すことが出来るようになつたはずなのに、俺は何故かそう出来なかつた。

「意味わかんないですよ……」

そう言って、肘を曲げてトマトを見る。表面は、何も変わらないように見えるが。

店長が立ち上がり、テーブルの横の窓のカーテンを開けたらしく。じゃつ、とこゝ音に、俺はトマトを握った手をテーブルの上に置き、そちらを向く。ライトにかけた真っ黒な布に、針で小さな穴をいくつも開けたような夜空が現れる。星々が、今口は特に綺麗だ。

「窓の外に、夜空が広がっているだろ？？」

微笑む店長に、俺は何か不安感を覚えた。首をかしげながらも頷く。

「しっかり見ておくんだよ……未来では珍しくなる、『月』がない最後の空だ。」

ぞくり、と背筋が冷たくなるのを感じた。

「……いや、待つて……」

「今日は晴れ、……僕が『月』になるために空に昇るのは、絶好の夜だ。」「待つて下さるよー！」



俺は思わず立ち上がる。

「……いやいや、信じられないですよ。何、それって消えりゃ」と?  
一人なんて、そんな簡単に消えられ  
ないですよ。あんたを知っている人は行方不明届とか出すだらうし、この店  
もどうするんですか? 大体……」

言葉に詰まる俺を、店長は微笑みを浮かべて見ていた。それに俺は、泣き  
そうになる。

「うん、だから、みんなの記憶には残らなーんだ。お店も気付かなーうちに  
店長が変わっていたという」と落ち着くはずだ。僕が居た証拠は何も残らないよ。」

「……じゃあ、俺の記憶も、なくなるってことですか?」  
悲痛な声を出す俺に、店長が手を細める。

「そう、そのはずだ……けど、僕のH「」を押し付けても良いかい?」  
「……何?」

店長が、真っ直ぐに俺のことを見つめる。

「……君にだけ、記憶を残したい。確かに僕が居たというその記憶を。そし  
て、月を見て思い出して欲しい。」

「……そんなの、

喉が詰まつて、視界が滲んでくる。俺は滅多に泣かないのに。消えるだ  
なんだという言葉よりも、こういつ言葉の方が胸に刺される。この人は、本当  
に消えてしまうのだ。

滲む視界の中、下を向いて黙つて頷いた。

「……ああ、うんね。空を見ない世界の中で、僕は君と出会いて本当に良  
かったよ。……君はまるで、家族のようだった。」

そう言って店長が、涙を零す俺の耳をそっと手で包んだ。視覚も聴覚も  
働かなくなつて、闇に溶けていく感覚を覚える。

「おやすみ。」

そのままテープルに突つ伏し、泣き疲れて寝てしまつたようだ。氣付いた  
ら夜中だった。

手には、あのトマト。



窓から差しているのは、二八年前になくなってしまったという、俺が見たことのない淡い光。いつの間にか蛍光灯が消えていた部屋の中は、毎にできる影とはまた違う、不思議な青い影と白い光の粒子で満たされている。

店長は、もう居ない。

それを察して、田頭が熱くなる。トマトを持ったまま、ふらり、と立ち上がり、従業員の名前やシフトが書かれてるホワイトボードを見る。店長の名前があるはずの欄に俺が知っている名前はなかった。あの人は本当に、俺の記憶だけを残して消えてしまったんだ。

「意味、分かんねえ……」なんなん、拷問じゅもんじゃんかよ……」

ボードを背せきにしてへたり込む。ボードと相対する位置に窓があるので、夜空がはつきりと見えた。窓が切り取る夜空の右上には、今まで写真集でしか見たことのなかつた丸い『月』。自身が光っているだけではなく、周りに光のベールを纏まつつているようだ。あれば、『満月』とこうものなのだね。

『満月』のときは、夜空が明るくて星が見えにくことこのをどいかで読んだ。だからだろうか、いつもより星が少なく感じる。

右肘を立てた右膝の上に置き、田線の先にトマトを位置する。相変わらず、ずつしりと重かった。ただの野菜であつた時には感じなかつた、硬さ。でも、無機質な硬さではなく、どじか温かみを感じるような不思議な硬さだ。

真珠。

俺は小さく呟つぶやいた。何となく、左手の親指と人差し指で爪弾つまびいてみる。

きん——

そう、鈴のような、軽やかな透明感のある音が鳴る。俺はまた、トマトを爪弾く。馬鹿みたいに、何度も、何度も。

きん、きん、きん——

ふと窓の外を見ると、その音に合わせて白い筋が夜空を切り裂いていた。この都会で見えることはあつたないほどたくさんの流れ星だ。

俺は大きく目を見開く。このトマトの形をした、真珠は。

おもむろに、トマトの中心に両親指をかける。硬質な音からは想像も出来ないよに、その表面はやつくりと裂けた。



賢治のまちから

# 高校生☆童話大賞



必ず認識したのは、その黒さ。続いて、その輝き。トマトの中には、まるでやぐらの様に沢山の漆黒の結晶のようなものが詰まつていて、それらはめりきりと輝いていた。

窓の外を見ると、黒に限りなく近い、深い青の夜空の中に、真っ黒な筋。  
……ちょうど、誰かが切り裂いたかのようだ。

俺は呻<sup>うめ</sup>き声を上げて、頭を抱えた。

「やっぱ割っちゃダメなやつだよなあ～」

裏部屋に間抜けな声が響く。

「のトマトは、眞珠で、宇宙だ。

何だそれ、意味分かんねえ。どうして俺に預けたんだ。

「こんな、一つの可能性にたどり着いてもなお割っちゃうような奴に預けんなよ……」

小さく、ぼやく。避け田を親指の腹で撫<sup>なで</sup>ると、嘘のように裂け田はなくなつた。俺はもう驚かなくなつて、ただ小さなため息を吐<sup>つく</sup>。窓の方を見上げて、恨めしげに月を見た。夜空の裂け田もすっかりなくなつている。

「宇宙とか、大事なもの……何これ、店長の形見にでも、天文学をやる励みにでもしろつてこと? 笑えねえつすよ。」

きん、と八つ当たりのようにまたトマトを爪弾いた。夜空には相変わらず、馬鹿みたいに綺麗な“月”があつた。

「……あんたは俺の兄貴で、父親でした。」

体操座りの姿勢で両肘を膝の上に置き、うつむく。手を開じ、祈るようにトマトを両手で包みこんだ。頬を、一筋の涙が伝つてこゝのを感じた。